

< 今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ 12章11-21節 >
コリントの教会の人たちへの厳しい叱責。しかしそれは愛ゆえの叱責。

1 (11-12) コリント書から知らされた事実と、示された神様の恵み。

『コリントの信徒への手紙Ⅰ、Ⅱ』を読んで来ましたが、考えさせられたことの一つに、パウロに信仰を導かれた人たちでも後からやって来た偽教師たちに簡単に惑わされてしまった、という事実があります。これは特に初心者が気をつけなければならないことでした。パウロがそこで示したのは、「あなたは何を誇るのか？ 他人より優れている自分の何かか？ 違う。誇るべきは自分の弱さであり、弱く罪深い私たちを赦して下さる主をこそ誇るべきなのだ」ということでした(Ⅱ12:8-11、Ⅰ1:18 以下)。私たちは皆、赦されて生かされている点で同じ。誰も誇れず、同時に、自分を卑下する必要もないのです。この後にパウロが語っている大事な二つのことにさらに目を向けておきたいと思います。

2 (13-18) パウロの言動は常に神様の私たちへの愛を考えている！

パウロは、コリントの人々の世話になることをしなかった理由を、子が親のために財産を蓄える必要はなく、親が子のために蓄えなければならないのだという、普通では逆のように思える内容で説明しています。何が言いたいのか？ 私たちはここで、私たちの造り主であるがゆえに親なる神様が、親に背いて生きたがる放蕩息子である私たちをどこまでも愛して見捨てず、自分の全財産を用いるに等しい御子イエス・キリストを犠牲にしてまでして救おうとして下さったことを考える必要があります。聖書を読んで初めて知らされる私たちの真の親である神様の愛の大きさ！ それを考えているパウロをここにも見る気がします。

3 (19-21) 神様が与えて下さった信仰鍛錬の場「教会」の民となる！

パウロは、「愛する人たち、すべてはあなた方を造り上げるため」(19)に語って来た、と言っています。この「造り上げる」と訳された原語は建築用語で、パウロは教会を建てることを具体的に考える中で用いています(Ⅰコリント 14:4,5,12,26)。だからここでも、20節以降に記された心配をしているのです。どんなに信仰熱心でも、人を悪く思い続けている限り、それは私たちの罪を赦して下さった神様が喜ばれる姿ではないし、それで平安が訪れるはずもないのです。私たちが神様が赦して下さったことを思いながら共に生き、鍛錬されていく場、教会を神様は用意して下さいました。これも神様からの大きな恵みです。